

ある、此の超越世界を現實化する信仰は人格完成の活力たる五玄具足の題目に依りて實現されるのである、此の時主客二觀即ち自他力の信憑は綜合統一されて現實化し其の福音も已利的に限らず社會的となつて價値的生活を實現し人生本來の欲求たる文化的生活を體顯されたのが吾日蓮聖人の宗教である。



信仰の寸心を改めよ

志 村 皓 堂

立正安國論を繙く時、其の終り謗法對治の催促を結する一段に此の語を拜し得らるゝ。吾人が信仰に生きねばならぬことは、古くして而かも新らしい問題である、何れの國何れの處に於ても、信仰を無視して生きんとするものありとせば、由々敷一大事と云はねばならぬ、何となれば宗教は吾人の生活上に於ける關係が極めて大であること云ふよりも、寧ろ極めて根本的であるからである。此の宗教は如何なる時代如何なる國家にも甚深の影響を與へて居つて、人が數人以上集まつて生活を共にする其處には、自然的必然的に宗教は存在せねばならぬのである、故に之を無視せんとしても許さない、と云ふよりも自ら無視し拋棄し得ない先天的約束を持ち來つて來る。

元來吾人は孤々の聲と共にそれが人である限り、宗教心を附與され之を包藏して居るのである。寸心の語は列子の「嘻吾れ子が心を見るに方寸の地虚一矣」とある此等から出て居るが、此の寸心の中には善、惡、無記の悉くが藏せられて一つも欠けては居らぬ、社會組織の要素も破壊の素因も、而して世界の耳目を驚かす何ものをも持つて居る、と同時に宗教心を欠いて居るものはない筈である、然るに此の宗教心が總ての事業に生命あらしめ意義あらしめんとして、心の奥底に躍動して居るに拘らず、之が吾人生活上に直接關係なき

ものとして、之を疎外し甚しきは毛視して顧みない。「人の人格、國の目的總ての事業の爲には、宗教の必要を認めない、唯た各自の努力によりてのみ成し遂げ得らるゝ」と思惟することが、一般的思潮ではあるまいか。

此の努力！眞摯の態度に於てなす努力！！こはそも何ものが齎すであらう、事業に向つて忠實であることは吾人が先天的に附與された宗教心の發動ではないか、此の信念を欠いた一事業に果して幾子の功果を收め得やう、此人がなす總ては輕薄であり、姑息であり、偽善であり、瀾縫である、斯の如く信念を欠きて事業を果さんとする人のみの社會は、遂に其の向上は阻止され、罪惡のみに充たされて、信ずる處は唯だ拜金の一途にして、行ふ處は唯だ詐譎陰謀のみとなり、終に救ふべからざるに至る、社會組織の要素は斯の如き人によりて根底から瀕へされるのである、如何に世は澆季とはへ痛嘆の極みではないか。

然るに今茲に宗教心の喚起に目醒るものがあつて、心の奥に動く信念を助長せしめんとしても、吾人の心を靈を感化する宗教其ものに、正しきものと然らざるものがあることに氣付かねばならぬ、即ち吾人は如何なる宗教に依つて處世の極致となすべきか？此の一事には充分の思考を要すべきである。蓋し正しからざる宗教に依つて信念の鞏固を期し、事業に生命あらしめんとすることは、恰かも雅致ある盆栽に毒水を灑ぐにも似て、茲に一大錯誤を來たし、遂に防遏し難き缺陷を生じて、其の完成を期することは到底不可能であらう、故に吾人が最も眞摯に考究せねばならぬことは宗教其もの、正否如何である！

個人として安心立命をなさんとする上に、若し個人が社會を離れたものとする、否な社會を離れしむる宗教ありとせば、之を以て宗教の正しきものとは云ひ得ない、何となれど吾人は現實の人生を尊重するものであり、進んで眞の國家の存立を理想とするものであるからである。若し又人生を以て夢幻的に觀じて、厭世悲觀主義を鼓吹する宗教ありとせば、之れ亦た宗教の正しいものではない、現實を悲觀するものは、人生をして意氣を銷沈せしめ、此をして意義あるしめず、爲めに堅實なる國家社會を形成せしむること不可能の故である、或は又現實をのみ重視して、永久を説くに疎き、或は未來にのみ憧れて現實を輕視するもの等、亦

た以て正しさを失ふ宗教であると云へよう。單なる現實主義、單なる未來主義は其の是非は暫く措き、斯る主義は現實的文明の上に發達力を減ずることは明である、今茲に此の兩夫を退けて理想と現實とを調和し、永久と人生とを結合せしめて、適當なる信念を興ふる正しき宗教がある、日蓮聖人によりて唱導せられた、法華經の教がそれである。

聖祖の見た法華經の教が、吾人の心底に動きつゝある宗教心を如何に發動せしめ得らるか、先ち之を經文の上に見やう。

第七卷には人生を尊重して「我れ敢て汝等を輕しめず汝等皆な當さに作佛すべきが故に」とある第六卷には「資生產業皆な正法に順ず」と其の生活と法華經の信仰との一致を説いてある、之れ一切をして理想生活ならしめたので、此の理想に生き得らるゝ人生なるが故に尊貴なのである、即ち吾人をして一たび高遠の理想に上らしめ、而かも立ち飯りて現實の人生の尊重すべき所以を知らしむべく明示されてある。摩耶の生める釋迦は生死無常の世に常住不滅を悟りて無始無終の一大生命を得、此の安きことなき三界の火宅に於て、而かも能く林野に安處することを得られた、如來の安處の一切の安處であり、其の不滅は一切の不滅であらねばならぬ、即ち吾人に於て安處せんとし滅せざらんことせば、なし能ふ不可能性あることを示されたのである、佛陀の一切は吾人の一切である、吾人と佛陀と何れに異りが有らう。

之を聖祖の垂訓に拜すれば、

遷滅無常ハ昨日ノ夢菩提の覺悟ハ今日ノ寤ナルベシ

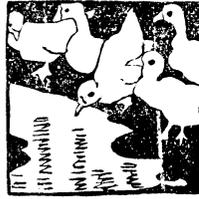
と妙旨驚くべきではないか、法華經信仰の上に人生を達觀すれば、無常は昨日の一夢と消え、今日は菩提に夢醒めて、現實の人生に意義を生じ根底を得て、茲に人格の完成を見、やかでは國家社會の安定となりて、所謂寶土の實現を見るに至らんことは、然らずや大地を的であらう。

汝早ク改メテ信仰、寸心ヲ速ニ飯キ實乘一善ニ然ハ則チ三界ハ皆佛國也佛國其ノ衰ヤ哉十方ハ悉ク寶土也寶土何ッ壞ヤ
國ニ無ク衰微ニ土ニ無ク破壊ニ身ハ是安全ニ心ハ是禪定ニ此詞此言可レ信ス可レ崇ム矣

と正しからざる宗教に對するが故に一善と云ふ、一の對等的なることを意義あらしめ、國家をして佛國土たらしむることはなし得ない、吾人が其の目的事業に着實にして、遂に社會を堅實ならしむると否とは、全く之に飯嚙し此の信念に住すると否とに存する。

今此ニ娑婆世界ハ離ニ三災ニ出ニタルニ四劫ニ常住ニ淨土ナリ佛既ニ過去ニ不レ滅セ未來ニ不レ生セ所化以テ同躰也
とは法華經の信奉によりて、現實を直ちに理想境たらしめた聖祖の叫びではないか、と同時に一面に於て此の生佛一如淨穢不二の大理想の實現は、此の現實の人生を離れて成立せざることを示されたものと拜し得らるゝのである。

今や世は先づ現實と理想との調和ある、そして人生に飯着を與ふる法華經に基き、心底の宗教心を躍動せしめて、現在成佛の平和境に達し、及び未來永遠の一大生命を感受して、人類の使命を果すべく、直ちに信仰寸心を改めねばならぬ、これ無からんか現代は終に亡びるであらう。(終)



念佛思想史に對する余の管見

福 島 瑞 岳

一 序 言

歐洲戰爭後、總ての諸問題は、世界的と成つて來た。そして、平和の聲は、風の靡く様に傳へられて來た。突如として、提唱された、ウエルス氏の、世界國の建設論の如きは、實に其の顯著なるものであらう。然し其の平和の裏面には、何物か精神的に、根底を與へるものがある様に思はれた。